2023 年度

卒業研究

# 自他交替はなぜ起きるのか
# 自他交替をどのように日本人英語学習者に教えるべきか

指導教員　岩下俊治

明星大学

人文学部

国際コミュニケーション学科

20H1-096　宮田廉之

目次

序論 1

第 2 章　伝統的な英文法書の説明

2-1　伝統的な英文書の問題点 2

2-2　自他交替現象に関して 5

第 3 章　意味論に基づく分析

3-1　意味役割 6

3-2　中間構文と起動構文 9

結論 11

参考文献 13

## 1 序論

英語の他動詞には、(1)のように能動文の目的語を主語として自動詞化する動詞がある。これを自他交替という。

(1) a. Tom broke the window.
b. The window broke.

先行研究において、この自他交替がない動詞を日本人英語学習者が目的語の伴った他動詞として用いる(2)のような誤りが報告されている。

(2) a. *The magician disappeared a rabbit.
b. *The rabbit was disappeared.

(須田, 大畑, 真也, 2021, p. 01)

更に、自動詞で表現すべきものが(2b)～(3b)のように受動文として表現される誤りも報告されている。

(3) a. *Ann happened the car accident. (Ann caused the car accident. / The car accident happened.)
b. *The star was appeared. (The star appeared.)

(大瀧, 2021, p. 161)

このような間違いはなぜ起きるのか。(2)の誤りが生じる1つの理由として、日本語における自他交替が可能な動詞を、英語では自他交替がない動詞に当てはめて誤用している可能性が考えられる。(1b)は(1a) の「トムが窓を割った。」という文の目的語「窓」を主語とした「窓が割れた。」という自動詞文である。(1a-b)の自他交替が「～を割る」「～が割れる」という意味の違いに基づいて説明される。(2a) の disappear は「マジシャンが兎を消した。」という日本語表現に基づいて、「消した」に相当するという理解から表現されたものと考えられる。このため、(2)-(3)の非文は、日本語と英語の自他交代の動詞がずれていることが原因であり、英語と日本語では自他交代を示す動詞が

異なると言える。

伝統的な文法指導では、自動詞は「主語+動詞」のS+V、他動詞は「主語+動詞+目的語」のS+V+Oという文構造を導くと教えられている。そして、自他交替とは前者の他動詞文の目的語である名詞句を主語にした構文である。しかし、自他交替が可能な動詞でも、動詞が表す意味によって、自動詞化が容認されない現象がある。従って、文型のみに基づいて自動詞を教える学校文法は自動詞と他動詞の違いを説明するのに不十分であるといえる。本論では伝統的な文法では説明がつかない自動詞構文がなぜ存在するのかを明らかにし、日本人学習者へのより適格な自動詞の教授法を提示する。

本論の構成として、初めに第2章1節で伝統的な文法では他動詞と自動詞の区別を説明できない点を幾つかの自動詞構文の例から明らかにする。第2章2節では、従来の英文法解説に基づいて自他交替を考察し、第1文型と第3文型のみでは自動詞の用いられ方を理解することは困難であることを分析していく。そして、第3章1節において第1文型と第3文型では説明が困難な自動詞構文の現象を、意味論的観点に基づいて解説する必要性について述べる。第3章2節では、前章において、特定の意味を表す上で自動詞化が不可能な場合がある例として「中間構文」と「起動構文」を比較する。そして、これら二つの構文に現れることが可能な自動詞には異なる二つの意味があることを考察し、最後の4章を結論とする。

## 2 伝統的な英文法書の説明

### 2-1 伝統的な英文法書の問題点

伝統的な英文法書の問題は、動詞を専ら5文型に基づいて説明しているという点にある。すなわち、(4a-d)のように文に含まれる要素の数という観点から自動詞は第1文形、目的語を伴う他動詞は第3文型であると区別している。

(4) a. The door opened.
b. Someone opened the door.
c. The plate broke into pieces.
d. Who broke this plate?

(江川, p. 185)

しかし、上記の例が挙げられている『英文法解説』のp. 186 では、「英語の文がたった五つの文型で処理できるはずないが」と述べられ、目的語の有無及び第1文型と第3文型に専ら基づいて自動詞と他動詞を区別することは困難である。このため、目的語の有無のみに基づいた他動詞と自動詞の解説は日本人英語学習者にとって、自動詞と他動詞をより適格に用いることを困難にするとして、以下伝統的な英文法書で挙げられている具体例とその問題点を分析する。

(5)の sell は他動詞の「(人が本を)売る」から「(本がよく)売れる」という意味への自動詞化であり、peel は「(人がオレンジの)皮を剥く」から「(オレンジの皮がよく)剥ける」という意味での自動詞化である。roast や read も「(人が肉を)焼く」、「(人が本を)読む」から「(肉がよく)焼ける」、「(本が違って)読める」へ変化している。

(5) a. This book sells well.

b. Ripe oranges peel easily.

c. The beef is roasting nicely.

d. The two editions of the book read differently.

(江川, p. 186)

『英文法解説』は自他交替によって自動詞化した(5)の動詞を全て第1文型として扱っているが、自動詞であれば全て第1文型に収まるという解説に問題がある。その理由は、(5a-d)が副詞を伴わなければ非文になる一方で、副詞を伴わない場合でも非文にはならない自動詞の類を共に第1文型へ混同しているからである。自動詞文であっても副詞を伴わないと非文になる場合とそうでない場合がある差異を第1文型は捉えられていないため、自動詞を第1文型によって過剰に定式化させているという問題が指摘できる。

(6a)は「嬉しそうに」という副詞を伴っているが、これが付加的である一方で(6c)は happily を欠いた場合は非文となる。(6d)も同様に、店の開く時間が示されている at ten を欠くことはできない。

(6) a. She smiled (happily).

b. She slept (on the sofa).

c. She lived happily.

d. The store opens at ten.

（江川，p. 186）

(6c, d) では副詞が伴わずに自動詞文が成立しないため、これらが第1文型にまとめられているのは動詞と主語のみに着目した一般化であり、適格な自動詞の使われ方を解説できていない。

更に『英文法解説』は(7)の自他交替について「このように自他同様に使われる動詞はたくさんある」と述べるのみである。

(7) a. The door opened. (ドアが開いた) (=(4a))

b. Someone opened the door.（だれかがドアを開けた）(=(4b))

c. The plate broke into pieces.（皿がこなごなに割れた）(=(4c))

d. Who broke this plate?（だれがこの皿を割ったのですか）(=(4d))

e. The flag was flying in the wind.（旗が風になびいていた）

f. Bill was flying his kite in the open field.（野原でたこを揚げていた）

（江川，p. 185）

(7)はそれぞれ「開いた/開ける「割れる/割る」「なびく/揚げる」という自他交替を示す例文である。(7a, c, e)はそれぞれ目的語を主語とする自動詞化現象であるが、自他同様に用いられる動詞はたくさんあるという説明は、どのような意味を持った動詞に自他交替は可能なのかという点について言及できていない。

以上、(5)～(7)までの例が示す自動詞化は専ら第1文型として自動詞化を論じているため、副詞や前置詞句などの要素を伴わなければ非文になる自動詞化を正確に捉えられてはいない。また、自他交替を解説する上で「自他同様に用いられる動詞はたくさんある」という説明では、自他交替の用法をもつ動詞を個々のものとして記憶することで自他交替を覚えるしかない。どのような意味を持つ動詞が自他交替のグループに

数えられ、また自他交替によって表現が全く異なる理由はなぜなのかを説明できていない。そのため、ある動詞に自他交替があるかは、動詞の意味に密接に関連しているという解説が望ましい。これに基づき、伝統的な英文法書が第1文型の枠組みにおいてのみ自他交替の自動詞化を解説することに、どのような問題があるのかを分析する。

### 2-2 自他交替現象に関して

学校文法は5文型に基づいて、自動詞と他動詞を SVと SVOという二つの構造に分類している。そして、学校文法はこの分類に基づいて、(8)のような他動詞文での目的語が主語になることが自動詞化であると説明してきた。

(8) a. John broke <u>the vase</u>.
b. <u>The vase</u> broke.

（高橋, 2017, p. 18）

他動詞文である(8a)には主語の John と 目的語の the vase の二つの要素が文に含まれているが、(8b) には主語の John が含まれていない。このため、文に現れている要素の数から自動詞文は SV であるという一般化が可能なように思われる。しかし、この一般化は(9a-b)のように自他交替がある場合でも、なぜ(9b)と対比して(9c)の自動詞文が容認されないのかを説明できない。

(9) a. John cut the bread easily.
b. The bread cuts easily.
c. *The bread cut.

また、学校文法は自他交替の有無に関して、個別の動詞が語彙的に自動詞用法を持っているかどうかに基づいて教えている。ところが、自動詞化ができないはずの他動詞 send が(10b, c)のように自動詞化するのはなぜなのか。(9b)と同じように副詞を伴った(10a)の send は非文であるが、自動詞用法のないはずの send は(10b)において適格である。

（10）a. *Books send easily to children.

b. 「ある母語話者がニューヨークタイムズの記事を友人にメールで送ろうとしたがうまく送れず、その友人に書いた文」

Sorry, but that article won't send.

c. I'm trying to contact a buyer about a product and the message won't send.（実例）

（久野・高見，2017 p. 122）

このように、5文型に基づいて自動詞を第1文型、他動詞を第3文型であると説明するのみでは、普通は自動詞として用いることができないはずの他動詞も自動詞として用いている例に遭遇した日本人学習者は大いに混乱することが予想される。そのため、適格な自動詞文が作られるかどうかは、5文型及び他動詞に自動詞用法があるかないか、という辞書的な定義に依拠して説明することは不適切である。自動詞文を指す第1文型は、既成の文構造を捉える上では役立てても特定の構文において自動詞化が容認されなかったり、自動詞化しないはずの他動詞が自動詞化できたりする理由を説明ができないからである。従って、自他交替の原理は構造的な観点のみからではなく、動詞の表す意味に着目した意味論的なアプローチを通して明らかにする必要がある。根本的な問題として、自他交替による自動詞文とは何を表している文なのかを明らかにする必要がある。次の章でこの点を明らかにする。

## 3 意味論に基づく分析

### 3-1 意味役割

意味論において、他動詞の自動詞化を説明する概念として「項構造」がある。「動詞は文の中核として主語、目的語、補語と結びついて、人や物の状態（state） や出来事（event） を…」（小野, 2018， p. 135） 表しており、これらの主語や目的語がある動詞と共に表す意味のことを意味役割（semantic role） という。そして、動詞の表す意味によって選択された主語と名詞を項 （argument） という。（11a）の例文での kick という動詞は「蹴る」という行為の動作主（Agent）と対象（Theme）を必要とし、前者は主語 Messi で後者は目的語の the ball である。

（11） a. Messi kicked the ball. ＝ メッシがボールを蹴った。

動作主　　対象

（小野, 2018, p. 137）

このように動詞の意味によって名詞や目的語が要請される構造のことを項構造（argument structure） という。そして、この項構造という概念に基づいて(1)で述べた自他交替の例を分析すると、(12)、(13)が示すように自他交替とは項の交替(argument alternation)であることがわかる。

（12） a. Tom broke the window.

b. The window broke.

（13） break：　〈(動作主)，対象〉

他動詞　　主語　　目的語 ＝（12a）

自動詞　　主語 ＝（12b）

（小野，2018，p. 138）

すなわち、(12b)の自動詞文は、「割る」という動作の影響を受ける項の「対象」が主語になっている文である。そして、動作主が現れないのは、「割る」という行為の動作主ではなく割れた対象について述べる文だからだ。しかし、通常窓が独りで割れることは想定されにくい。そのため、(12b)の自動詞文に動作主が現れないのは、話し手が言及したくないためか、窓が壊れた原因が不明であるかのいずれかである。これを示す例として(14)を挙げることができる。

（14） a. Mary broke a wine glass. May I use your broom to clean the glass?

b. A wine glass was broken. May I use your broom to clean the glass?

（久野，高見，2005 p. 65）

(14)は、メアリーの友人がパーティーの最中にワイングラスを床に落として割ってしま

った際の発話内容である。床を掃除するため箒を貸してもらう際、ネイティブの発話としては（14b）が自然な発話である。その理由は、メアリーの責任を露骨に示す（14a）の能動文に対し、ワイングラスを割った動作主のメアリーではなく「ワイングラスが割れてしまった」という事態を表す（14b）の方がメアリーへの配慮になるからだ。そして、この（14b）と等価的な表現としては A wine glass broke. も可能である。（久野・高見, 2021 p. 65）従って、（14a）への言い換えとしての（14b）と等価的な A wine glass broke. が挙げられるということは、自他交替による自動詞文は動作の影響を受けた対象について述べる文であることが理解できる。

また、（10b, c）の自他交替の用法がないはずの send が自動詞化できるのは、send の目的語であるメールを特徴付けるに十分な「送ろうとしたが、メールを送信できない」という特性が文脈で現れているからである。send は「動作主」「目的語」「着地点」の3つの項を必要とする3項動詞と呼ばれる。（15）の send の主語は目的語のメールを送信する「動作主」で、そのメールを受信する人は「着地点」である。

（15）I'll send a mail to you. = 動作主(Agent)　目的語(Theme)　着地点(Goal)

既述の（10a）の *Books send easily to children. が非文になる理由は、動作主の主語が存在せず目的語の「本」が独りで着地点の「子どもたち」へ送られることが英語話者の感覚において想定できないからである。しかし、The vase breaks easily. が「花瓶」について「割れやすい」という特徴を表しているのと同様に、通常送れるはずのメールが何らかの理由で送信ができないという文脈がメールを特徴付けられる。このため、通常はメールを送信する主語を不在にできないはずの send が（10b, c）のように自動詞化するは、目的語を特徴付けるためであるといえる。

自他交替が項の交替であると明確になり、また自動詞化は動作の影響が及ぶ対象について述べていると明確に理解できる。また、能動文における主語を不在にして意味が成立できないはずの動詞が自動詞化できるのは、能動文での目的語を特徴付けるに十分な文脈が存在しているからである。しかし、なお次の問題が残る。（9a）のThe bread cuts easily. は正しいのに、（9c）の*The bread cut.が正しくないのはなぜなのか。これを明らかにするため、次節ではいくつかの自動詞構文を比較し、自動詞は全て第1文型類に集約されるのではなく、実際にはそれらの動詞が持つ意味に基づいて分類が可能であるこ

とをみていく。

### 3-2 中間構文と起動構文

意味論の「項」という概念において、自他交替の自動詞化は、他動詞が要請する項の動作主と対象の内、対象が主語になった文であることを前節で分析した。そして、(14)の文脈を踏まえ、自動詞化は他動詞文で目的語への影響があたかもひとりで起きたかのように表す文である。しかし、自動詞化は他動詞文での目的語に及ぶ影響を表す文であると述べるのみでは、自動詞化した break が The vase breaks easily. と The vase broke. のいずれも正しい一方で、(9b)の The bread cuts easily. は適格でも（9c）*The bread cut. は非文になる理由が説明できない。そのため、自動詞構文を比較することで、自動詞はどのような意味に基づいて分類が可能なのかを本節で分析する。

(16a, b)のような cut と break の自動詞文は「中間構文」と呼ばれ、その特徴として①動詞が現在形で、②副詞の要素を伴っている、という点が挙げられる。これに対し、(16c, d)は「起動構文」と呼ばれ、①時制が過去形で、②副詞が伴っていない。

（16）a. The bread cuts easily.（中間構文）
b. The vase breaks easily.（中間構文）
c. *The bread cut.（起動構文）
d. The vase broke.（起動構文）

（高橋，2017，p. 17-18）

中間構文に用いられる動詞は状態変化を意味する動詞であり、また副詞が示すように中間構文は主語の特性について述べる文である。このため、状態変化ではなく接触の意味を持つ touch と hit の（17)の中間構文は非文になる。

（17）a. *The cat touches easily.
b. *The door hits easily.

（高橋，2017，p. 17）

起動構文は一度きりの出来事を表す文であり、(17)の動詞 touch と hit もこれに用いることはできない。そして、起動構文において(16c)が非文である理由は、能動文における行為者の存在が不明であるか、あるいは言い表したくないという要請に基づいた自動詞化の原理に適さないからである。The vase broke. の場合、行為者が明らかでなくひとりで花瓶が割れたという事象が、英語話者にとって想定が可能であるため適格である。一方、*The bread cut. はそのパンを切る行為者が不在のままパンがひとりで切れるという現象を想定できないため、非文になる。

これら2つの構文を比較すると、(18)の表が示すように、自動詞はその動詞が持っている意味に基づいて、現れることの可能な構文が異なっていることがわかる。

(18)

| | cut | break | touch | hit |
|---|---|---|---|---|
| 中間構文：「状態変化」 | ○ | ○ | × | × |
| 使役・起動交替：「状態変化」「自力性」 | × | ○ | × | × |

（高橋，2017，p. 21）

このように、伝統的な英文法書が自他交替の自動詞化を第1文型にのみ基づいて説明する一方、意味論の分析を通して中間構文と起動構文の異なる構文に現れる自動詞は実際、異なる意味要素を持った2種類の自動詞に分けられることがわかった。この分類を踏まえ、3章2節において述べた The vase broke. は正しいのに、*The bread cut. は正しくない現象についてもその理由を適格に解説することが可能になる。起動構文の自他交替は、能動文における目的語への状態変化をあたかもひとりで起こしたかのように表現する文ある。 break がひとりで「壊れた」の意味を表せる一方、cut は動作主の存在なしに何かが切れた、という事態を表すことができないため、起動構文に用いることはできない。

## 4 結論

伝統的な英文法書は自動詞と他動詞の違いを第1文型と第3文型に基づいて解説する傾向にある。しかし、すべての自動詞を第1文型に当てはめる解説は、副詞や前置詞句を含まなければ非文になる(6c)のような自動詞文の存在を考えると適格ではない。また、英文法書は自他交替に関して、自他交替に数えられる動詞は数多くある、という説明に終始している。この解説では、自他交替はどのような意味変容に基づいて目的語と主語の交替が起こるのかを説明できず、(9c)のように副詞を含まない起動構文として用いることはできない自動詞について説明できない。

このように、第1文型と第3文型に基づいた過剰な自動詞構文の一般化や、自他交替を個々の動詞に基づいてのみ日本人英語学習者へ定着化させようとする解説方法は、実際の英語の自動詞構文がどのようにして成り立っているのかを適切に説明できない。そのため、意味論的な観点を導入し、自他交替における自動詞化はその特徴として、目的語に及ぶ影響の結果があたかも独りで起きたかのように表す文であることを考察した。そして、このように目的語に及ぶ影響について述べる自動詞化という点は、通常、自動詞化が起こらないはずの他動詞がしばしば自動詞化する理由についての解説も可能である。すなわち、能動文での目的語を特徴づけるに十分な文脈がある場合である。(15)が示す3項動詞の send は(10a)において、意味の成立上欠くことが不可能な項である動作主を欠いており、自動詞化が不可能なはずである。しかし、送信されるはずのメールが送信されないという状況は目的語のメールの特徴づけが可能であるため、自動詞化が容認されるということである。

自動詞化が能動文での目的語の特性について、それに及んだ影響の結果が独りで起こったことを示す文であることが明確になっても尚、次の問題が残される。中間構文で現れることが可能な動詞が起動構文の場合には用いることが不可能な例である。中間構文で自動詞化が可能な cut は、break と同様に起動構文に用いることはできない。この理由は、誰かが「切る」という行為に及んだ結果「パンが切れた」という状態が生じるため、英語母語話者の感覚ではこの動作主を不在にすることができないからである。そのため、第1文型は副詞が伴わなければ非文になる自動詞文について説明ができていないだけでなく、中間構文で適格な動詞が起動構文では適格ではない理由についても解説できていない。

中間構文は伝統的な英文法解説書のように第1文型にのみ基づいてではなく次のように教えるべきである。すなわち、「主語を特徴付ける要素」が欠如した自動詞文は、日英両言語に共通して非文法な自動詞構文となる場合がある、という解説である。副詞が伴わない中間構文は非文であるという特徴は、副詞が欠けている(19a)の日本語表現を通して解説が可能である。

(19) a.？ 彼女が生きた。
b. 彼女は[幸せに]生きた。

(19a) の「彼女が生きた」という表現は次の理由により不自然である。すなわち、その主語に彼女が人間であるという意味が含意されているため、「(人が) 生きる」という情報は文脈や副詞が何も伴わない単体の1文で「彼女」を特徴付けることができないからである。しかし、例えば(19b)のように「幸せに」という副詞が伴う場合、「生きた」という述部は「彼女」を特徴付けるに十分な情報となるため適格な自動詞文となる。このため、義務的な要素としての副詞や名詞句が伴わない自動詞文が非文となり、第1文型と見做す従来の文法解説においては解説が可能ではない (9b) のような自動詞文は次のように説明するべきである。①自動詞が主語を特徴付けるという観点において、初めからその主語によって自動詞の表す意味が当たり前のものは主語を特徴付けられず、②その自動詞が示す内容が主語を特徴付けるに十分な文脈や副詞が必要である、という解説である。

また、起動構文の *The bread cut. のような、自他交替が中間構文としては適格でも起動構文として適格ではない現象について次のように解説すべきである。①「壊れた」や「切れた」などの日本語の起動構文の自動詞は、能動文の主語が不在である点では英語と共通しているが、②英語話者の感覚では動作主によって目的語への結果状態が引き起こされるという感覚が支配的である。このため、英語の自他交替及び起動構文として不適格な自動詞が存在するという点について、日本語で可能な自動詞化の「動作主の不在化」が、英語では可能ではないという事実を主軸として解説するべきである。

これを踏まえ、自他交替の自動詞化は文型に基づいてではなく、動詞が持つ語彙的意味に基づいて説明する必要がある。自動詞構文の主語と動詞の後に現れる副詞や前

置詞句など、特定の要素を欠いた場合にその構文が非文になったり、ある自動詞化構文に倣って特定の動詞を用いてみても非文になったりすることは、大いに日本人英語学習者の混乱を引き起こすことが予想される。すなわち、表面上の分析では伝統的な第1文型に集約が可能かと思われる自動詞構文は、その構文の動詞の意味分類に基づいて適格になる、ということである。

参考文献：

江川泰一郎,(1993)『英文法解説 -改訂三版-』金子書房

大瀧綾乃，(2021)「自動詞への正しい理解を高めるための明示的文法指導の効果」『中部地区英語教育学会紀要』中部地区英語教育学編

小野尚之，(2018)「語彙意味論」『日英対照 英語学の基礎』三原健一，高見健一編 くろしお出版

久野暲，高見健一,(2005)『謎解きの英文法 文の意味』くろしお出版

久野暲，高見健一,(2017)『謎解きの英文法 動詞』くろしお出版

須田孝司，大畑真也,(2021)「日本人英語学習者による他動詞の自動詞化」『国際関係・比較文化研究』静岡県立大学国際関係学部

高橋勝忠，(2017)『英語学を学ぼう』開拓社

綿貫陽,(2001)『ロイヤル英文法 改訂新版』旺文社